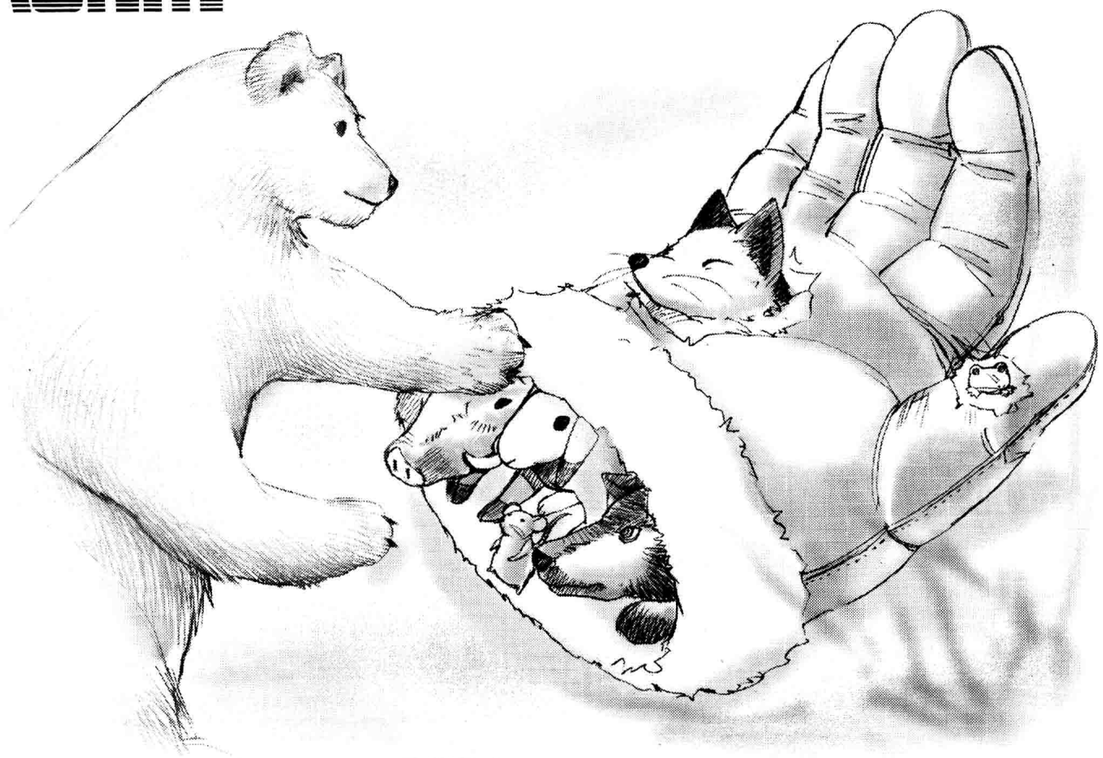
エレクトロニクスで社会に貢献する

ROHM

身も心も暖まる、"手袋"の物語です。



26 てぶくろ

（ウクライナの昔ばなし）

雪深い森を子犬と一緒に歩いていたおじいさんは、
てぶくろをかたほう落として、行ってしまいました。
するとねずみがかけてきて、てぶくろにもぐりこんでいいました。「ここで暮らしてみましょう。」
そこへ、「だれ、てぶくろにすんでいるのは?」と、かえるが現れ、手袋に入れてもらいます。
うさぎも、きつねも、おおかみも、いのししも、次々と「なかにいれてください」と入ってきます。
そしてとうとう、大きな熊までも。
はちきれそうなてぶくろの中で動物たちは体を寄せ合って仲良く過ごします。
しかし、てぶくろを落としたことに気づいたおじいさんが引き返してきました。
おじいさんの子犬が吠えると、びっくりした動物たちは、雪の中に散っていきます。
おじいさんは、残されたてぶくろを拾い上げました。

参考図書：内田莉莎子訳／ウクライナ民話／『てぶくろ』／福音館書店刊

ローム君の新・博物日記

世界昔ばなしを科学する

このシリーズは、半導体技術で世界に貢献するロームがお届けしています。おなじみの世界の昔ばなしの中から毎回テーマを一つとりあげ、そこに隠れているいろいろな不思議を科学の視点で見つめます。さて、今回のおはなしは…

◉見捨てられない、安心感。

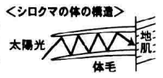
「てぶくろ」は、ウクライナの昔ばなしです。中に入る動物がだんだん大きくなっていくという「クレッシェンドの形」と、どこまでも大きく伸びる手袋という「極端さ」は、昔ばなしで好まれる典型です。この昔ばなしは日本でも非常に人気が高く、特に幼児が喜ぶそうです。一番の理由が、子どもは狭いところにぎゅうぎゅう詰めで入るのが大好きだから。もう一つは、子どもは、おじいさんが手袋を落としていくところに大きな不安を感じます。手袋は自分の投影でもあると、無意識に感じるようです。しかし最後はちゃんとおじいさんが引き返して来て拾ってくれます。なんでもないオチのようですが、子どもにとっては「大人に見捨てられていない自分」を実感でき、満足感·安心感を与えてくれる話になっているのだとか。また、ぎゅうぎゅう詰めなのに動物たちが手袋に入るのを拒否しないところに「共有する大切さ」も感じられ、たいへん秀逸な物語であるといえますね。

◉冬にはロマンティックな手袋を。

手袋の歴史は古く、一説には古代エジプトの壁画にも描かれていたといわれています。ヨーロッパでは、古代ギリシャのホメロスの作品に、バラの棘に刺されないように手袋をはめたと記述があります。16世紀は、まさに手袋の時代で、ヨーロッパ各地で刺繍をほどこしたものや香料をしみ込ませたものが流行しました。その頃には日本にも、ポルトガルから西洋式の手袋が伝来しました。中世ヨーロッパの騎士は決闘する際、お互いの手袋を交換したり、女性に貰った手袋を愛情のしるしとして帽子やカブトに入れておくこともあったようです。また、眠っている間に女性にキスされたら、男性はその女性に手袋を贈るという変わった習慣もあったようですよ。こんなロマンティックな手袋、クリスマスプレゼントにぴったりかもしれませんね。

◉暖かい着こなしの秘訣。

暖かさを感じるには、熱を逃がさないことが大切です。実は身近な物質の中で、熱伝導率が一番低いのは空気。服を着ると体と服の間に空気の層ができます。その空気の層をいかに閉じ込めるかが暖かい着こなしの秘訣なのです。ちなみに動物の体毛は空気をため込む暖かい構造になっています。例えば、極寒の地に生きるシロクマの体毛は、透明で中身が空洞になっていて、空気をためやすくなっています。しかも、この空洞を光ファイバーのように使って、シロクマは太陽光を効率よく地肌まで取り入れているという説まであります。



さらに地肌の色は、なんと、熱を吸収しやすい黒。白く見えるのは、透明な毛が光を反射しているせいなのです。もし、昔ばなしのクマがシロクマなら、暖まる目的だけでは手袋の中に入らなかったでしょうね。

昔ばなし監修／昔ばなし研究所 所長　小澤俊夫
取材協力／京都工芸繊維大学 大学院 教授　木村照夫

ローム株式会社
www.rohm.co.jp
本社／〒615-8585 京都市右京区西院溝崎町21
TEL(075)311-2121 FAX(075)315-0172
http://www.rohm.co.jp/

ゆめがあふれるあしたのために、LSIのロームです。

← 第25話へ
第27話へ →